



道端に庚申塔が残る覚井集落

町並みについて

- ◆球磨川沿いの農村風景が広がる中にある中世山城の岩城跡、蔵城跡を中心に「覚井」、「馬場」といった武家社会の名残が字名に残っています。
- ◆また、球磨地域の伝統的で固有の寺社建築様式である「流造」がみられる木本神宮や二宮神社などの社寺や、地域内に約600基ほど現存するとされる庚申塔の中でも最古の「迫の庚申塔」などが、この地に根付く信仰文化を色濃く伝えていきます。



町並みの中心(核)となる伝統的建造物

木本神宮

- ◆岩城跡にある16世紀建立の一間社の典型とされる神宮で、吹き放ちの拝殿があり、頭貫や木鼻の絵様に、球磨地域独特の建築意匠を見ることができます。
- ◆伝承によると、1513年に相良氏13代長毎が市房山神宮に参詣しようとしたが、洪水のため宿願が果たせず、市房山を一望できる同地に市房山神宮の神を勧請し設立したと言われており、同神宮を詣ると市房山神宮参詣の願いが満たされるとされています。



市房山を一望できる岩城跡にある木本神宮

「覚井」は、中世山城の下方に設けられた区域のカコイ(罎、梔)が転化したものといわれています。覚井集落には、庚申塔の他にも球磨郡内で最古とされる木造釈迦如来像が座する荒田観音堂が残り、中世から近代にかけての武家社会と信仰文化の融合を観ることができます。